

文言小説研究序説

— 『太平廣記』 ①

大橋 由 治

An Introductory Study of *Wen Yan Xian Shuo* (Narratives in Literary Language): *The case of Tai Ping Guang Ji*

OHASHI Yoshiharu

一 はじめに

『太平廣記』は勅命により編纂された文言小説の總集である。宋の太平興國年間に編纂されたことにより『太平廣記』と稱される。全五百卷は四百を超える書籍からの引用で構成されている。内容は文言文で書かれた小説を主として蒐集されているが、中には野史や傳記のたぐいからの引用も含まれる。つまり小説と言っても現代的なものとは異なり、傳説、逸話、説話などから創作まで、物語的要素を有するもの全般を含んでいるのである。全体的には志怪體の極短篇を中心としているが、傳奇體のようにやや長めの創作作品も含まれているのである。

今日的な視点からは『太平廣記』を小説集と見なすことに異論がないであろう。しかし當時のひとびとはこの書を類書と見なしていた。類書と必要に応じて記述を参照できるように事類ごとに排列された百科辭典のようなものである。北宋の目録『崇文總目』では『太平廣記』を分類項目中の類書に列ねている^(一)。南宋の鄭樵『通志』の中でもやはり類書類に分類している^(二)。鄭樵は『通志』の中で以下のように言っている。

且つ『太平廣記』とは、乃ち『太平御覽』別に『廣記』一書を出だし、専ら異事を記せるものなり。奈何ぞ『崇文』の目の説く所此の意に及ばずして、但だ以て群書を博采して類を以て門を分かつと謂へるか。凡そ是れ類書なるは、皆な群書を博采して類を以て門を分かつべし、知らず『御覽』の『廣記』と又た何ぞ異なるを^(三)。

鄭樵の『崇文總目』に對する批判の當否は別にして、『太平廣記』の特長は彼の言う「専ら異事を記す」の語に言い盡くされている。編纂當初

からの『太平廣記』に對する基本的な認識は、類書であつたと考えてよからう。しかし『太平廣記』の特徴を鄭樵が通常とは異なる出來事を書き記したものと理解したように、この點に焦點を當てれば類書以外の書として認識するものが出現するのは自然な成り行きである。

實際に宋代の他の目録を見てみると、『太平廣記』を小説類に分類しているものがある。宋代の私撰の晁公武『郡齋讀書志』、尤袤『遂初堂書目』、陳振孫『直齋書錄解題』等の目録はともに『太平廣記』を小説類に分類している。

因みに『郡齋讀書志』、『直齋書錄解題』の解題では以下のように言う。

『太平廣記』五百卷。右皇朝太平興國の初め、李昉等に詔し古今の小説を取り編纂成書せしめ、『太平御覽』と同にこれを上る。(『郡齋讀書志』)

太平興國二年、學士李昉、扈蒙等に詔し『御覽』を修めしむ。又た野史、傳記、故事、小説を取りて選集せしむ。明年書成り、『太平廣記』と名く。

(『直齋書錄解題』)

『郡齋讀書志』は「古今の小説」から成ると言い、『直齋書錄解題』は「野史・傳記・故事・小説」から成ると言っている。『郡齋讀書志』がここで言う「小説」とは概念がやや廣く恐らく野史、傳記、故事等を含めて考えており、『直齋書錄解題』がここで言う「小説」とは四部分類中の子部小説家類を指していると思われる。

二 『太平廣記』の成書と流傳

『太平廣記』の名前の由來は先にも述べたとおり、太平興國年間に勅命により編纂されたからである。王應麟『玉海』では以下の文を引用している。

太平興國二年三月戊寅、翰林學士李昉、扈蒙、左補闕知制誥李穆、太子少詹事湯悅、太子率更令徐鉉、太子中允張洎、左補闕李克勤、左拾遺宋白、太子中允陳鄂、光祿寺丞徐用賓、太府寺丞吳淑、國子寺丞舒雅、少府監丞呂文仲・阮思道等十四人に詔し、同に前代の『修文御覽』、『藝文類聚』、『文思博要』及び諸書を以て門を分かち編して一千卷と爲し、又た野史、傳記、小説雜編を以て五百卷と爲さしむ^(四)。

ここに言う一千卷とは『太平御覽』のことであり、五百卷というのが『太平廣記』のことである。この二書は同じ編纂グループに同時に編纂されたものである。こうしたことから後來『太平廣記』の成書に關して諸人の認識がやや異なるという結果をまねいた。先に擧げた鄭樵は『太平御覽』別に『廣記』一書を出だす^(五)と言ひ、晁公武は『太平御覽』と同にこれを上る^(六)と言つてゐる。その實際はどうであつたのだろうか。

『太平廣記』の成書時期については『玉海』に詳しい。そこでは以下のように言う。

是れより先帝類書を閱するに、門目紛雜たり、遂に詔して此の書を修めしむ。興國二年三月昉等に詔して野史、小説を取りて、集めて五百卷と爲さしむ(五十五部、天部より百卉に至る)、三年八月書成り、號して太平廣記と曰ふ(二年三月戊寅集むる所にして、八年十二月庚

子成書）六年詔して板を鏤らしむ。（廣記鏤本天下に頒くるに、言ふ者以て學者の急とする所に非ずと爲し、墨板を收めて太清樓に藏す。）二書命ずる所の官皆な同じきも、唯だ克勤、用賓、思道は他官に改められ、續ぎて太子中允王克正（原と貞に作る。後人宋の仁宗の諱を避けて改む）、董淳、直史館趙隣幾に命じて預からしむ（五）。

上述の目録に比べて詳細な記述ではあるが、これには明かな誤謬もある。先ず、括弧内の原注にある「五十五部」に分類しているのは『太平廣記』ではなく、『太平御覽』である。同様に「八年十二月」に書が成つたのも『太平御覽』である。『太平廣記』は興國二年三月に詔を受け、翌年興國三年八月に書が成つているので成書まで一年あまりの時間しか要していない。

一年あまりで書が成つた後、板木が彫られた。その次の原注に「廣記鏤本天下に頒くるに、言ふ者以て學者の急とする所に非ずと爲し、墨板を收めて太清樓に藏す」とあることから『太平廣記』には宋刻本が無いと理解することも出来る。しかしここに言う「鏤本」とは版本の意味で、印刷されたものである。「墨板」は整版の意味で板木で印刷されたものを指すが、ここでは板木そのものを指していると思われる。おそらく全土に版本を頒布した後に「學者の急とする所に非ず」と意見が出され、板木を太清樓に納めたと解するべきではないだろうか。そうだとすれば官刻の『太平廣記』は少數ながら存在していたことになる。

宋代の目録にも『太平廣記』の名は見える。『崇文總目』は北宋の慶曆元年（1041）に著わされた目録である。その類書類に『太平廣記』を著録している。その後の目録『郡齋讀書志』は上述の如く小説類に『太平廣記』を著録している。そしてさらに蔡蕃が『太平廣記』をもとに編纂した『鹿革事類』と『鹿革文類』をも著録している。さらにそれよりおそく編纂された『遂初堂書目』小説類には『京本太平廣記』を著録している。目録以外の文獻中にも『太平廣記』の存在を伺わせる記述が散見する。その一つが王闢之『澠水燕談錄』に見える逸話である。それは以下のようなものである。

元豐中、高麗の使朴寅亮明州に至り、象山の尉張中詩を以てこれに送るに、寅亮詩に答ふるの序に花面の豔吹、鄰婦青脣の斂を愧じ、桑間の陋曲、郢人白雪の音に續ぐの語有り。有司中小官は、當に夷使と外交すべからざるを効して奏上す。神宗左右を顧みて、青脣とは何事ぞと。皆な對ふる能はず。乃ち以て趙元老に問ふ。元老不經の語なれば、敢えて以て聞せずと奏す。神宗再びこれに論す。元老『太平廣記』を誦して、隣夫の其の婦の火を吹くを見て、詩を贈りて火を吹き朱唇動き、薪に添へたる玉腕斜めなり、遙かに見る煙裏の面、恰も霧中の花に似たりと曰ふを睹る有り。其の婦其の夫に告げて曰く、君豈に學ぶ能はざるやと。夫曰く、汝當に火を吹くべし、吾も亦たこれに效はんと。夫乃ち詩を爲りて、火を吹きて青脣動き、薪に添へたる墨腕斜めなり、遙かに見る煙裏の面、恰も鳩髻茶に似たりと云ふと云ふ。元老の強記此の如し、怪僻小説と雖も該覽せざるは無し（六）。

上記の逸話は『太平廣記』卷二百五十一所收の以下の一條にもとづいている。

鄰人夫婦の相諧和するを睹る者有り。夫外より歸り、婦の火を吹くを見、乃ち詩を贈りて曰く、火を吹き朱唇動き、薪に添へたる玉腕斜めなり、遙かに見る煙裏の面、大いに霧中の花に似たりと。其の妻も亦た夫の歸りを候ひて、これに告げて曰く、鄰人夫婦を見る毎に、極めて甚だ多情なり。適々來たりて夫婦の火を吹くを見、詩を作りてこれを詠めり。君豈に學ぶ能はざるやと。夫曰く、彼の詩何れの語を道へるやと。乃ちこれを誦す。夫曰く、君當に火を吹くべし、爲に別にこれを製さんと。妻も亦た效ひて吹く。乃ち詩を爲りて曰く、火を吹き青唇動き、薪に添へたる黒腕斜めなり、遙かに見る煙裏の面、恰も鳩檠茶に似たりと^(六)。

この笑話は趙元老の博覽強記を傳えるもので、博識が『太平廣記』にまで及んでいたことを物語るものである。しかもここに登場する高麗からの使者も『太平廣記』の説話を典故に使用しているのであるから、『太平廣記』が國外にまで傳わっており、そのうえよく讀まれていたことがわかる。こうしたことから頒布された官本は少數であつたが、それをもとに出版された刻本は北宋の時點で相當数が流通していたと考えられる。宋の羅燁が『醉翁談錄』中で「幼くして太平廣記を習ふ」と言っているのを上記の逸話と考え合わせれば、『太平廣記』は相當に流通しかつ讀まれていたものと想像される。

三 『太平廣記』の引用書目

『太平廣記』の引用書目の總數を正確に把握することは非常に困難である。談刻本が前部にあげた引用書の合計は三百四十三種である。しかし中華書局一九六一年發行の『太平廣記』付屬の汪紹楹による點校説明によれば、ハーバードインデックスの『太平廣記引得』の統計では書目があつても書中に引用されていないものが十五種、書目に無くても實際に引用されているものが百四十七種あり、これを合計すると引用書の總數は四百七十五種であると言う。ところが事はそれほど簡單ではない。

中國の古典書は定まつた名稱がなく呼稱が一定していない事が多く、そのうえ略稱を用いる場合もある。そのため引用書の總數を確定するためには重複を削らなくてはならない。中華書局一九九六年發行『太平廣記索引』では引用書目を五百二十三種としているが、この書の凡例によればこの書では呼稱が異なる同一書を整理しており、總數が異なるのはその処理の結果生じた増減である。いくつかの例を挙げれば、『商芸小説』を『殷芸小説』へ統合、『唐缺史』・『闕史』・『缺史』を『唐闕史』へ統合、『幽冥錄』・『幽冥記』を『幽冥錄』へ統合、『王子年拾遺』・『拾遺錄』を『王子年拾遺記』へ統合、『博異記』・『博異傳』・『博異錄』を『博異志』へ統合したなどがそうである。しかしながら同一の書であるかどうか判断が付かず統合できないものもある。『靈怪錄』と『靈怪集』、『甄異記』と『甄異志』、『甄異錄』、あるいは『紀聞』と『紀聞錄』、『資譚錄』と『譚

寶録』、『渚宮遺事』・『渚宮故事』と『渚宮舊事』などはおそらく同一の書に對する異なる呼稱だと考えられるが、確證がないため別に項目を立てている。

こうした問題點は文献批判により解決できるものもあるが、現行の『太平廣記』に關してはこれも全能ではない。例えば『太平廣記』の中には『傳記』を出典とする説話が九條ある。その中の「張雲容」、「蕭曠」の二條は實際は裴鉉『傳奇』からの引用である。その他の「房瑄」、「瑟」、「漢中王瑀」、「李龜年」も『傳記』からの引用ではないようである。こうした例は地道な文献批判により確認できるものである。しかしこうした間違いは『太平廣記』編纂時に起きたものとは到底考えられない。おそらく傳書の過程で挿入されたものと考えるのが至當であろう。

さらに甚だしい例では『太平廣記』編纂時に存在しなかった後世の書名が出典として記されているものがある。例えば卷三百十五に『吳興掌故集』からの引用として「狄仁傑檄」を掲載しているが、この『吳興掌故集』は明の徐獻忠が編纂したものである。この説話自體實際には『朝野僉載』からの引用だと思われるが、出典に『吳興掌故集』と記したのは明代の人であろうと思われる。なぜならば談刻本の引用書目録の中にも『吳興掌故事』が含まれているからである。こうした事情により『太平廣記』の引用書目の總數を正確に確定することは不可能である。

もう一度ハーバードインデックスの統計を借りると、引用書中で現存しているものが二百三十五種、散佚したものが二百四十種であるという。そうしてみれば半分以上はすでに散佚しているのである。さらにはその中、藝文志等の目録中に見られないものが半分近く含まれている。よしんば原書が存在するものであっても、原文を比べてみると『太平廣記』のほうを整っているものがある。『太平廣記』の文は校勘の資料として使用できるのである。つまり如上の問題點があるとは言え依然として『太平廣記』は文献としての價値が非常に高いのである。

四 分類項目

『太平廣記』は書目の分類上は同時期に編纂された『太平御覽』などとともに関書に屬する。類書とは百科辭典のように多様な事項に關する記述を蒐集編纂したものである。項目の排列には二種があり、ひとつは『太平御覽』に代表される森羅萬象を類別に排列したものであり、もう一つは『佩文韻府』のように事物や事項を韻により排列したものである。『太平廣記』は『太平御覽』などと同様に類別により排列されており、分類項目は説話に登場する主要なモチーフをもとに九十二類に分類されている。ある種の項目にはさらに下部に細目が設けられている。例えば草木類の細目は、文理木、異木、蘿蔓、草、草花、木花、果、菜、五穀、茶荈、芝、苔、香藥、服餌、木怪、花卉怪、藥怪、菌怪に分けられている。こうしたモチーフによる分類は同種の説話を比較するのに非常に便利である。

『太平廣記』の分類については小説史上もう一點注目すべき點がある。『太平廣記』の四百八十四卷から四百九十二卷の九卷につけられた標題は「雜

傳記」である。他の巻が主要な登場モチーフである神仙、鬼、夢、草木などを標題にしているのは異なり、この雜傳記は文章のスタイルを標題として名付けている。これらの巻には十四篇が収録されている。その作品とは『李娃傳』、『東城老父傳』、『柳氏傳』、『長恨歌傳』、『無雙傳』、『霍小玉傳』、『鶯鶯傳』、『周秦行紀』、『冥音錄』、『東陽夜怪錄』、『謝小娥傳』、『楊倡傳』、『非煙傳』、『靈應傳』の十四篇である。これらは共に唐代傳奇の代表的作品である。雜傳記とはこれら唐代傳奇を収録するために設けられたものなのである。

唐代傳奇は唐代に書かれた文言小説である。もともとこの傳奇は唐代に書かれた一文言小説集の名稱であった。それがのちに文言小説の一ジャンルを表わす名稱として使用されるようになったものである。文章の長短について言えば、傳奇は文言小説中においては比較的長めである。文體について言えば、紀傳體の傳記を書く手法を用いて書かれている。手法は傳記に學んでいるが傳記とおおきな違いは、實在の人物が登場する場合であつても描いている世界が虚構であることである。なかには登場人物すら完全に架空のものもある。傳奇では奇なる出來事であることが重要なのである。

先に掲げた雜傳記中の作品の多くは奇を伝えることを旨とするが、そこに描かれているのは人間社會である。言うなればこれらは虚構を手段として現實を描いた作品である。しかしながら『周秦行紀』、『冥音錄』、『東陽夜怪錄』、『靈應傳』は異界での幻想的な物語である。恐らく當時の人々もこれらに描かれていることをどこかで起こつた實際の事件と見なしていたわけではない。例えば『東陽夜怪錄』などは、主人公の名前が「成自虚」であり、架空の人物であることが明白である。内容も駱駝、驢馬、牛、犬、猫などが人間に化けて集まり詩を作るといつたものである。そうであるにもかかわらず雜傳記に収録されているのである。

『太平廣記』を編纂した宋代の學者が唐代傳奇を收載する巻の項目に雜傳記と名付けたのは、史書目録の影響を受けたものと思われる。『隋書經籍志』『舊唐書經籍志』にはともに雜傳類が設けられており、あくまでも史實として扱われているがそこには多くの小説的な作品が収録されている。『太平廣記』がその雜傳記を小説の一ジャンルとして創始したことは小説史上においては畫期的なことであつた。それはそれ以前には範疇に含めていなかった虚構も小説として認めたことであり、『漢書藝文志』以來の傳統的な小説觀から一步踏み出す行爲であつたからである。

ただ、『太平廣記』の分類は全般に渡つて統一された基準に基づいていないわけではない。先に挙げた唐代傳奇のほかにも多くの傳奇作品は存在するし、それらが『太平廣記』のなかに収録されていないわけではない。それらの作品は主要なモチーフにより分類されたため、雜傳記に収録されなかつたのである。例えばいくつかの例を上げれば、沈既濟の『枕中記』は卷八十二の異人類に収録されている。同様に『虬髯客傳』は卷百九十三の豪俠類に、『古鏡記』は卷二百三十の器玩類に、『離魂記』は卷三百五十八の神魂類に、『柳毅傳』は卷四百十九の龍類に、『補江總白猿傳』は卷四百四十四の畜獸類の細目「猿」に、『任氏傳』は卷四百五十二の狐類に、『南柯太守傳』は卷四百七十五の昆蟲類に収録されている等々である。

No.	項目	卷總數	卷	細目等
19	幼敏	1	175	
18	俊辨	2	173 174	卷174 後部に幼敏類を付置する。
17	精察	2	171 172	
16	知人	2	169 170	
15	義氣	3	166 168	
14	廉儉	1	165	後部に吝嗇類を付置する。
13	名賢	1	164	後部に諷諫類を付置する。
12	識應	1	163	
11	感應	2	161 162	
10	定數	15	146 160	後部に婚姻類を付置する。
9	徵應	11	135 145	細目に帝王休徵、人臣休徵、邦國咎徵、人臣咎徵有り。
8	報應	33	102 134	細目に金剛經、法華經、觀音經、崇經像、陰德、異類、冤報、卑妾、殺生、宿業畜生有り。
7	釋證	3	99 101	
6	異僧	12	87 98	
5	異人	6	81 86	
4	方士	5	76 80	
3	道術	5	71 75	
2	女仙	15	56 70	
1	神仙	55	1 55	

これらはその作品名からしても雑傳記に収録されている傳奇と同様に傳記體に倣つて書かれたものであることは明白である。先に引用した『玉海』では『太平廣記』の分類項目数を五十五部と間違えていた。実は四庫提要もこの誤りを踏襲している。実際の分類項目は九十二部となっている。そしてさらにその下部には百を超える細目が設けられている。以下にその一覧を挙げておこう。

43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20
食	酒	器玩	博戲	伎巧	相	醫	卜筮	算術	畫	書	樂	儒行	才名	文章	博物	豪俠	驍勇	將帥	權幸	職官	銓選	貢擧	器量
1	1	4	1	3	4	3	2	1	5	4	3	2	1	3	1	4	2	2	1	1	2	7	2
234	233	229 232	228	225 227	221 224	218 220	216 217	215	210 214	206 209	203 205	202	201	198 200	197	193 196	191 192	189 190	188	187	185 186	178 184	176 177
後部に能食、非食類を付置する。	後部に酒量、嗜酒類を付置する。		細目に弈棋、彈棋、藏鉤、雜戲有り。	後部に絶藝類を付置する。		後部に異疾類を付置する。					細目に樂、琴、瑟、歌、笛、箏、羯鼓、銅鼓、琵琶、五弦、箏篋有り。	後部に怜才、高逸類を付置する。	後部に好尚類を付置する。	後部に武臣有文者類を付置する。			後部に雜譎智小類を付置する。					後部に氏族類を付置する。	

67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44
神魂	夜叉	鬼	神	妖妄	幻術	巫	夢	童僕	情感	婦人	酷暴	輕薄	無賴	嗤鄙	嘲諷	詼諧	褊急	治生	謬誤	諂佞	詭詐	奢侈	交友
1	2	40	25	3	4	1	7	1	1	4	3	2	2	5	5	8	1	1	1	3	1	2	1
358	356 357	316 355	291 315	288 290	284 287	283	276 282	275	274	270 273	267 269	265 266	263 264	258 262	253 257	245 252	244	243	242	239 241	238	236 237	235
			後部に淫祠類を付置する。			後部に厭呪類を付置する。	細目に夢休徵、夢咎徵、鬼神、夢游有り。	後部に奴婢類を付置する。		細目に賢婦、才婦、美婦人、妬婦、妓女有り。								後部に貪類を付置する。	後部に遺忘類を付置する。				

92	91	90
雜録	雜傳記	蠻夷
8	9	4
493 500	484 492	480 483

六 おわりに

この論考では唐以前の文言小説を研究する上で欠くこのできない貴重な資料である『太平廣記』について、その概要を確認してきたが版本については言及することができなかつた。版本の種類と系統については稿を改めて論じることにはしたい。

- (一) 『崇文總目』卷三類書類上。
- (二) 『通志』藝文略第七・類書類第十一・類書下。
- (三) 『通志』校讎略第一・泛釋無義論。
- (四) 『玉海』卷第五十四藝文・承詔撰述・類書・太平興國太平御覽太平廣記。
- (五) 『玉海』卷第五十四藝文・承詔撰述・類書・太平興國太平御覽太平廣記。
- (六) 『澠水燕談錄』卷九・雜録。
- (七) 『太平廣記』卷二百五十一「鄰夫」。この話の出典は笑言、あるいは明鈔本では笑林とする。
- (八) 『醉翁談録』甲集卷一・小説開闢。